

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

小学生高学年小説の部 最優秀賞

4 週間

明光小学校六年

五十嵐 いがらし

ひなた

僕たちは、同じ日、同じ病院で生まれた。これは神様がくれた最初の奇跡だと僕は思う。きっと彼もそう思ってくれていると思う。

「愁、早く起きろ。ちこくするぞ」

朝が苦手な僕は毎朝こうしておきななじみのコウちゃんに起こしてもらっている。それが当たり前になっていたから。

「お前いいかげん自分で起きろよ。おばさんが『愁は功汰君がいないと生きていけないの』って泣いてたぞ」

コウちゃんがハンカチで涙をぬぐう母さんのまねをする。

「泣くはおおげさだよ。でも、僕は本当にコウちゃんがいないとだめだけどね」

エヘッと笑って言う頭をチョップされた。チョップはほぼ毎日されることだが、何度やられても痛かった。こうやっていつも朝から二人でじゃれあつたりしているものだから、よく「付き合っている」とからかわれたりする。僕たちは、これをネタで言っていると分かっていたため、特に気にすることはなかった。

「おはよ二人とも、今日もラブラブだねえ」

校門の前や教室に入るときに言われるこの言葉も、もう当たり前になっていた。

「ねえ、ちよつとノート見せて？」

数日後。明日にせまったテストに僕は必死。

「しかたねえな。お前これで本当にテスト大丈夫なのかよ」

あきれたように言うコウちゃんを無視してノートを受け取る。クラスで一番、学年で二番という成績をもつコウちゃんには、テスト前にノートを見せてもらっている。ノートを見せてもらう理由は僕が授業中にノートをとらないから、というのもあるが、そこはだまっておこうと思う。

「お前どうせ授業中かくれて絵でも描いてんだろ」

凶星だ。まさかコウちゃんが知っているととは思ってなかったから、おもわずノートから顔を上げたいいきおいでイスの背に強く背中を打ってしまった。

「いったあ…赤くなったかも」

痛みが声になって出てしまった。

「大丈夫か？ま、ノートに関しては俺、お前の絵好きだから許すよ」

首をさわって、目をそらすコウちゃん。これは、僕だけが知るコウちゃんの照れてる時のしぐさだ。

「もう、何照れてんの？それよりも、僕の絵のどこが好き？いくつ言っても良いよっ」

「照れてない。お前はテストに集中しないとその俺の大好きな絵も描けなくなるぞ」

ズバリと言われたのでまたノートに戻る。

「コウちゃんに好きって言われたのがうれしかっただけなのになあ…」ノートを書き写しながらつぶやく。このつぶやきがきこえたのか、コウちゃんがまたうつぶやきがちに首をさわりながら口を開いた。

「学校のロビーの絵の、すきとおった感じとか…お前らしくてす、好き」

「そうなんだあ。あの絵の景色は僕のお気に入りの場所なんだよねっ」学校のロビーの絵というのは、僕が高校一年のときに描いた絵。コンクールで賞をとってかざられた絵だ。あの場所は僕にとってコウちゃんと

行った中で一番の景色だった。コウちゃんは覚えてないだろうけどね。

「ふうん。今度俺も連れてけよ」

「わかった。テストの点数良かったらね」

目的があればがんばれる。だから僕はこの時コウちゃんと一緒にあの場所へ行くために一生けんめい勉強しようという気になった。

「おい、起きろ。机でねてるとかぜ引くぞ。今日テストだろ」

「うう…大丈夫、勉強はばっちりだからあ」

いつもどおりコウちゃんがむかえに来た。どうやら僕は机でねていたみたいだ。勉強のことで頭がいっぱいで気づかなかった。というかまだねむいから起きれない。起きないといけないのに動けない。まだねている頭で「またチョップされるのかな」と考えながらだんだんと意識は夢の中へと落ちてゆく。そのときかすかにコウちゃんの声がきこえた。

「お前がそんなにがんばったならあと二十分待つ。ねてて良いぞ」

ん、今ねてて良いって言った？僕は今の言葉でまだ少しだけ目がさめた。ねてても良いと言われても最近たまに出るコウちゃんのやさしさにたいしていろいろ考えてしまうため、ねれない。

「どうした、起きたか？」

「ん：おはよ、コウちゃん」

目がさめてもまだ重いまぶたを開くと、コウちゃんがベッドにすわっていた。机の横にベッドがあるため、横を向いてねていた僕はコウちゃんと目が合ってしまった。いつも表情の少ないその顔は、いつもと違ってとてもねむそうだった。きつとあまりねていないのだろう。

「そういえば今日起こしに来る時間早かったね。コウちゃん朝食食べたの？」

「今日はお前がちゃんと勉強できてないんじゃないかと思って早く来たけどしつかり勉強してたみたいだから。あと、朝食はここで食べることになってる」

コウちゃんはこうやって僕の心配ばかりする。いくらおさななじみで家族のような存在だとしても過保護すぎると思う。最近もみようにやさしくなったと感じることが多くなった。こんなによさしくされると僕も困る。「実は好きでした」みたいなオチなら、良くはないけどまだましな方。このやさしさがもし、僕へ何かかくし事をしているとかなら傷つく。何でも知っていて、目を見るだけで考えていることが分かる。そんなのがおさななじみだと思ってた。でもきつと、僕はまだ、コウちゃんのすべてを知っているわけではないのだろう。昔は直感的にコウちゃんの考え

ていることが分かったのに、今では何も感じない。コウちゃんの考えていることが分からない。とてもさみしい気分になる。

「おいボーツとするな。朝食呼びにきたぞ」

「あ、ごめん。今行くよ」

今そんなこと考えてたらテストに集中できないから、いったん奥のほうにしまっておこう。

「功汰君おいしいかしら」

母さんが上きげんでコウちゃんにきく。どうやらコウちゃんが朝食を食べてくれるのがとてもうれしいようだ。

「はい、うちのよりうまいです」

「もうっそんなこと言ったって何も出ないわよっ」

よほどうれしかったのかお気に入り紅茶を飲みほした。きつとこれでもかくしているつもりなのだろうが全然かくせてない。

「あ、こら愁。ちゃんと食べなさい。功汰君もうおわっちゃいそうよ」
コウちゃんと僕で態度を変える母さんが少し頭にきた。僕はあまり食欲がないのだが、テストのためにもがまんして朝食を食べた。

「おばさん、洗面所までかしてもらってありがとうございます」

僕が食べ終えるころにはもうコウちゃんは食べ終わっていて、顔まで洗ってきたみたいだ。

「良いのよ、気にしないで。それよりいつも愁がおそくてごめんなさいねえ。ほら愁、早くしなさい」

何だよ。いつもはそんなこと言わないくせに。コウちゃんの前だからって。イライラしてたらテストに集中できないじゃん。

「どうした、きげん悪いのか」

「別に」

いつもより早く出てゆっくり歩いている通学路でコウちゃんが聞く。僕

はそれになりたいして分かりやすいだろうけどどうそをついた。すると一呼吸置いてコウちゃんが話した。

「何かあるんなら、俺に言え」

またそうやってやさしい言葉をかける。最近コウちゃんが口を開けば、そこからはやさしい言葉しか出てこない。前までは毎日のことだったチョップもまったくされなくなった。

「うん、ありがと。コウちゃん最近やさしいね。やさしいコウちゃんも好きだけど今までのコウちゃんも良かったかなあ」

「ん？お、おう」

コウちゃんを見ると、首をさわって道路のすみを見て歩いていた。僕はそれを見ておもわず笑ってしまった。

「あはっコウちゃん照れてるの？かわいいー」

「照れてねえってっ」

おもしろいのでからかってみると、コウちゃんが必死に抗議しながら右うでを上挙げて。ひさしぶりにチョップでもされるのかとワクワクしながら待っていると、ゆっくりとその右うではおろされた。

「んなことよりお前がいつもどおりで良かった」

おろされた右うでのかわりに頭に大きくあたったかい手の感触があった。ふつうならこの手からやさしさを感じるのだろうが、今の僕は何も感じなかった。こうやって心配させて、めいわくをかけているようにしか思えなかった。僕がしばらくだまっていると手がするりとはなれていった。「行くぞ」と言って先を歩くコウちゃんに、僕は小さく「ごめんね」とつぶやいて後を追いかけた。

午前十時三十分。その時間の教室にはただカリカリと字を書く音だけがひびいていた。僕はそのきんちょうした空気に飲まれないうちに問題用紙をにらみつけるように見ていた。見たところ、すべて勉強したはんの問題だ。勉強内容は、コウちゃんのノートと昨夜の勉強のおかげで

七割くらい頭の中に入っている。問題番号をまちがえなければ目標の点数をとれるはずだ。しんちょうに一問目から答えを書こうとシャーペンを答案用紙に近づけると、後ろから机をトントンとたたかれた。たたかれたほうを向くと、そこには紙きれがおいてあった。きつとコウちゃんからだろう。

『進んでないみたいだけど大丈夫か？最低でも七十点はとれよ。功汰』その紙きれにはコウちゃんの雑に書かれた文が書いてあった。僕はまた心配させたなと思いつつも、そうやって心配してくれるのがうれしくもあった。少し複雑な気持ちで『大丈夫だよ！』と紙に書いて後ろへわたした。そして、二つ後ろのコウちゃんの席へわたったのを確認してからまた問題を解き始めた。

「どうだ、七十点以上とれそうか」

テストが無事終わり、コウちゃんが僕に聞く。

「うん、コウちゃんのノートのおかげでバッチリだったよ。ありがとね、これでまだ絵が描ける」

感謝の気持ちをこめて言った。なんとか空白なしで終わったので、とても安心している。コウちゃんはまた照れたようなそぶりを見せ「よかったな」と言った。最近やさしくなってるんだか照れることも増えたような気がする。コウちゃんにはますますなぞが深まるばかりで、どんなに考えてもそのなぞは解けなかった。その代わり、いつも『コウちゃんにとって僕はじゃま』という結果にたどりついてしまう。コウちゃんがあなつてしまつて本当のコウちゃんじゃなくなったのも僕のせいなんだ。僕はきつと他の人にも、コウちゃん自身でも気付かないところに気付けてしまったんだと思った。

「どうした、具合でも悪いのか」

コウちゃんが首をかき上げて聞く。

「大丈夫、ポーツとしてただけだから」

「そうか、何かあったら言えよ」

「ちょっと過保護すぎるんじゃない？そんなに僕に気使わなくて良いよ」

「俺は別にお前に気イ使ったりなんか」

どうしましょう、なんだか気まずい空気になってしまいました。その原因は僕にあるけどここを切りぬけられるほど話すのが上手なわけではない。どうすることもできない僕はおもわず、また空気を悪くするようなことを言ってしまった。

「嫌なら嫌って言えば良いのに。僕もう帰るね、先生には熱があつたって伝えといて」

コウちゃんはあわてた顔で出ていこうとする僕を呼んだ。

「おい、待て愁っ」

だが名前を呼ばれたのはこの一回だけですぐに声が聞こえなくなった。教室を出るまぎわコウちゃんを見た。コウちゃんはそのとき見ていたクラスメイトに話しかけられていた。

「なんだよ、僕には最近笑ってくれなかったのに。やっぱ僕といてもあんまり楽しくなかったんだね」

勢いで学校から出てきたが、まだ昼。日が高くてあたたかい。家に帰って勉強という気になれない僕は、大好きなあおの場所に行った。

ここちよい風がふき、僕の髪をなでる。太陽の光が円く広がる湖に映り、キラキラとしていた。僕はいま、そんなきれいな景色の中に立っている。この場所はまるで童話の中の場所のようだった。

「ふう…」

僕は大きく深呼吸をした。きれいな空気を体の中に入れて、また僕の中から出ていく。不思議とそれがたまらなくうれしくて、何度も深呼吸をくりかえした。こうすることで僕もこの空気にとけこめるような気がした。悪いことや嫌なことをわすれられるこの空間は、僕にいやしをあた

えてくれた。さっそく僕は、緑のきれいなやわらかい草の上に座り、持ちこんだ道具でキャンパスに絵を描いていった。コウちゃんが好きだと言ったこの景色をもう一度。今の気持ち、想いで描いた景色はきつときれいではないだろう。何もしゃべらず静かに筆を進める。真っ白だったキャンパスに筆をすべらせていく。今の気持ちにまかせてどんどんとすべらせていく。筆先から伝わってくる感覚が僕は好きだ。描いていくうちに何も考えなくなつて、筆が自由に描いているような、あの感じが好き。

「できた」

あつというまに描きおわつたその絵は、とても汚かった。何重にもぬり重ねられた水辺。青黒くよどんだ空。深い緑にモヤがかかったような木々。これが今の自分の気持ちをあらわしている絵なのだろう。

「……汚い。最悪だ」

何もかもわすれられるような美しいこの場所にこんな汚い絵は合わない。大好きな、思い出が残るこの場所で、汚い絵を描いてしまうのは、きつと僕がまたコウちゃんとのことだなやんでいるからなのだろう。そのとき僕はあるおさない時のことを思い出した。

『知ってるか？この湖の前でお願い事をする時神様がかなえてくれるんだって』

『ええっ知らなかった!!コウちゃんくわしいんだねえ』

小さい頃に二人でコッソリ来たときの思い出だった。あのととき二人で願い事をしたのをおぼえている。だがその内容を思い出せない。何を願ったのかはおぼえていないがあれが本当ならやっておくべきだと思ひ、僕はイスから立ち上がった。草をふんで歩き、湖の前で止まった。コウちゃんからめいわくがられているならば願い事は一つだった。僕はかくごを決めて言う。本当になつたなら少し悲しいが、コウちゃんのため。僕

は大きく息を吸った。

「コウちゃんの前から僕を消してください」

そう言ったしゅんかん強い風がふき、木々がザラザラと鳴る。水面も、音をたてずはげしくゆれた。それは少しぶきみだった。気付けばここに来たときよりも日が落ちてすずしくなった。まわりが木でかこまれていゝるこの場所は肌寒くも感じた。時計を見ると、もう三時を過ぎていた。何でそんなに時間を使ったのかは分からないが、時計を見ておながすいてしまったため、家に戻ることにした。

「ただいまあ。早退してきたあ…つてあれ？母さん？」

専業主婦の母さんは基本家にいる。この時間はいつも録画したドラマを見てはいるはずだ。家に居ないのはおかしい。そう思つて家をさがしまわつていゝるとキッチンに机に置き手紙があつた。

『このあたりのママさんたちで沖繩に行つてきまーす！四日くらい居ないからお父さんにどうにかしてもらつてね♡ 母より』

「……は？」

今朝まで何も知らされていなかったため、とてもおどろいた。母はこういう気まぐれなところもあるな、と思つた。こういう時はコウちゃんの家にとまったりもするが、今は会いにくい。

「ただいま」

夜、げんかんが開く音がして元気がない声が聞こえた。

「おかえり父さん」

僕はそんな父さんに元気に「おかえり」と言うのが決まりだ。

机に向かい合せて座る。父さんの声に元気がないが顔はとても元気そうだった。

「どうだ、うまいか？父さんがんばつて作つたんだ」

父さんは、自分の分を食わずに僕に味の感想を求めてくる。父さんにし

てはがんばつたオムライスだと思ふ。

「うん、おいひい」

すると父さんはとてもうれしそうな顔でよろこんだ。

「愁、せつかく男二人なんだからなんかしゃべらないか」

口にオムライスをつめこんだ僕に父さんが言った。そのオムライスのみこみ、「今日は体調悪いから。ごめん」と言つて断つた。少し酒の入つた父はまゆを八の字にさせて「ええ〜」とおおげさに落ちこんだ。僕はさらにごめんね、とつけくわえて部屋に戻つた。

「はあ…今日は一回にいろんなことがあつてつかれたなあ、お風呂入つてねよ」

「……う…しゅ…愁」

低い声で名前を呼ばれ、体をゆすられる。

「あれ、父さん？どうしたの」

「どうしたのじゃない。朝だぞ、ちこくするぞ」

起こしてくれたのは父さんだった。時計を見ると七時四十五分をさしていた。いつもコウちゃんが起こしにくる時間を五分過ぎていた。

「コウちゃんは？」

「コウちゃんつて誰だ？ねぼけてないで早くしたくしろ。父さん仕事行くからな」

「いつてらつしやい…」

父さんもよく知つていゝるはずのコウちゃんのことを知らなかった。どういゝることだろう。僕は母さんからも確認をとるために電話をかけた。電話から音がきこえる。七回めのコールのあと、ねむそうは母の声がきこえた。早起きな母のことだから昨夜酒を飲みすぎたのだろう。

「あのさ、早くから悪いんだけど、佐野功汰つて人知つてる？」

コウちゃんのことをたずねた。

『佐野オ？ああ、おとなりさんね、佐野さんがどうしたの？』

コウちゃんの名前を出しても「功汰君」と言わない様子から、母さんもコウちゃんのことを知らないことが分かる。

「僕とコウちゃ：功汰って仲良かったよね」

電話の向こうから声がきこえなくなった。だが、しばらくしてまた母さんが話しはじめた。

『そおなのお？あんたたちが二人で居るとこ見たことないけど』

「あ、ありがと。じゃあまた、沖繩楽しんできてねっ」

僕はあわてて通話を切った。どうやら母さんはコウちゃんのことをただのおとなりさんという風にしか思っておらず、僕たちとの接点がないと言っているということだ。これはもしかしたらきのうの願いがかなってしまったのかもしれない。僕はしかたなく一人で学校に向かうことにした。

「おつはよ、愁っ」

後ろから呼ばれた名前に、声をかけてきたのがコウちゃんかと思い「コウちゃん!」と言ってふり向いてしまった。

「なんだ、高地か。おはよお」

「おい、なんだってなんだよ。それよりコウちゃんって誰のこと？彼女できたの」

どうやら高地もコウちゃんと僕の仲が良かったことを知らないみたいだ。

「なんでもないよ。人ちがいだったみたい」

「行こう」と言って高地と二人で教室に向かった。教室までのろう下でコウちゃんを見たが、男子のグループに入っていて、話しかけることができなかった。そのグループの中で話しているコウちゃんは、とても笑っていた。

授業中後ろを向いても先生だけにおこられて、コウちゃんにはおこられなくなった。休み時間コウちゃんに思いきって話かけようとするけど、

コウちゃんはいつのか違うグループのところに行ってしまった。僕は今日一日で終わるだろうと、一日ぐらいコウちゃんがいらないことを体験してみるのも良いだろう、そう思いがまんして学校をおえた。

「なんかあんまり楽しくなかったなあ」

部屋で一人、つぶやいた。

次の日も目をさますとそこにコウちゃんの姿はなく、かわりにねぐせのついた髪の毛の父さんの姿があった。この日も高地と教室まで行き、コウちゃんに話しかけることも、話しかけられることもなかった。

この生活が四週間以上も続くななんて思ってもいなかった。

僕はこの四週間のうちで、新しい友達も何人かできた。コウちゃんかわすれられてなやみもなくなり、それなりに楽しかった。今の一番の友達に高地だった。朝はいつも校門前で会い、二人で教室に行った。高地も絵を独学で学んでいるらしく、よく話が合った。高地はコンクールに出したことがないらしく、自分の部屋にかざったり、ほしいという人にタダであげたりしているようだ。仲良くなって高地の家に遊びに行った時にはとてもおどろいた。高地の部屋は、絵がたくさんかざってあった。そのどれからも幻想的なふんいきがただよっていた。

「一枚もらったいい？」

少しこうふんした僕は一枚絵をもらうことにした。

「いいよ。好きな持って行って」

高地は僕に自由に選ばせてくれた。僕は、たくさんかざられた絵の中から一番心に残る絵をさがす。どれもとても良い絵だ。独学だとは思えない。広い森の中で一人立たずむ少女の絵、これは少女のさみしげな感情が伝わってくるようだった。このような実際の景色に空想の人物や物を入り混ぜた絵もあれば、近所の公園や、キャンバス全体が青くぬられただけという絵もあった。高地の絵にはすごいことに何十枚もある絵一つ

一つにタイトルがつけられていた。あの少女の絵は「お母さん」、キャンバス全体が青い絵は「雲」というタイトルだった。僕はその少女の絵が気に入ったので、少女の絵をもらった。

「ねえ、この『お母さん』ってどういう意味なの？」

僕は一つ気になっていたことを聞いてみた。

「そんなの自分で考えなよ、タイトルや絵から見えるストーリーをさがすってのも一つの見方だよ」

高地は答えをおしえてくれなかった。

その後二人で絵について話してから絵を持って家に帰った。さつそく持っているがくぶちからサイズの合うものをさがしてきて、絵を入れた。机の目の前の壁にかざると森の深い緑色が頭につきささるようなはく力があつた。

「お母さん、かあ：お母さんを失ったみたいなきな感じなのかな」

考えたストーリーは今の僕にそっくりだった。お母さんを失った少女は、お母さんとの大切な思い出のこの場所でいつも独り泣き続ける。そんなストーリーが思いうかんだ。

まるでコウちゃんからわすれられた僕みたいだと思った。

ねる前にはコウちゃんのことを考えた。そうすることでなんだか落ちつけるからだ。今日もコウちゃんのことを考えていたら、目にジワリと涙がにじんでいった。コウちゃんのことを考えて涙が出たのははじめてだった。今考えれば、話が合う高地と話しても、コウちゃんといるときより楽しいと感じたことがなかった。まだもしかしたらコウちゃんといっしょにいたいと思ってしまうのかもしれない。

次の日僕は学校に行かなかった。学校に行くフリをしてあの湖に行った。真っ白なキャンバスを持って。

「ああ、こうやってモヤモヤすると絵描きたくなるクセなおさないとなあ…」

独り言をつぶやきながら色をぬって行く。今度は前のようにはなく、ていねいに、やさしく描いた。高地が言っていたストーリー。それはつまり描き手がこめた作品への想いということ。僕が今、この作品にこめたい想いは一つだけだった。今まであたりまえだったコウちゃんがいた日々が、僕が願ったせいですべて消えてしまったこの気持ちをこめたい。大切なおさなじみの前から消えてしまった僕の想いをこの絵にこめた。だんだん日が高くなり、少し暑くなってきた。それでも僕はまだ筆を止めない。描き続けた。時がたつのなんてわすれて描き続けていたら空はオレンジ色だった。出来上がった作品は今まで描いたどんな絵よりもきれいだつた。今まで描いた油絵の中で一番だつた。自分で描いた絵なのに見とれてしまう。コウちゃんが好きだと言ってくれたあの絵よりもきれいにかがやいていた。すきとおっていた。なんの汚れも感じない絵だつた。この絵をコウちゃんに見せたらきれいだとはめてくれるのだろうか。絵を描き終えると考えたのはコウちゃんのことだつた。この絵のタイトルはいつかコウちゃんにつけてもらいたい。そのいつかがいつになるかは分からないけど、そのいつかがくるまで僕は待とうと思った。するととつぜん視界がぼやけた。目がおかしくなったのかと思つたがちがつていた。僕の中から涙が流れ、ほほを伝う。絵を描きあげられたうれしさと大切なコウちゃんへの想いで涙が止まらなかった。涙が草の上に落ちて草をしつとりとぬらす。あのお願いはなかったことにできるのだろうか。コウちゃんはいつか僕を思い出してくれるのか。そんな気持ちで僕は声を出して泣いた。落ちつくまでこうしていようと思ひ僕は子どものように泣いていた。

「コウちゃっ：コウちゃんっ」

不意に僕の後ろで草をふむ音が聞こえた。そして、僕が聞きたかつた声も聞こえた。

「ばか、何泣いてんだよカッコ悪い」

その言葉と同時に頭に細いものがコツンとあてられた。これはなつかしいコウちゃんのチョップだった。

「え？僕のこと、おぼえてる…？」

僕の質問にコウちゃんはゆっくりうなずいて答えた。

「なんで…いるの？」

鼻をすすりながら今コウちゃんに聞きたいことを全部聞いてみた。それにたいしてコウちゃんは長い前髪から細く見えるやさしい目で答えてくれた。

「学校のロビーの絵見てお前のこと思い出したから。この場所に昔二人で来たことも思い出して、ここにならお前がいるような気がしたから走ってきた」

「だから服汚れてるんだね。けがはしなかった？」

涙をぬぐい、コウちゃんの服を見るとたしかに汚れていた。そこまでして僕のところにたどりついたんだと思うと、また涙が出そうになっていた。

「おい、もう泣くなって」

コウちゃんが大きな温かい手で僕の頭をグシヤグシヤになでた。

「もお大丈夫だよ。だって僕コウちゃんがいれば安心だし」

コウちゃんはまた首をさわって照れながら

「俺もあのグループにいるときに違和感を感じたけどお前がいれば安心できる」

と言った。四週間はおたがいおさなじみの大切さを体験した日となったのだと、僕は思った。

「コウちゃん、この絵最高のしあがりなんだけど、タイトル考えてよ」
コウちゃんは少しなやむようにうでを組んでキャンバスに近付いた。そしてニッコリと笑い、キャンバスのうらにペンで文字を書いた。

「タイトルは『愁』で良いだろ」

キャンバスのうらに書かれたのは僕の名前だった。

「これ僕の名前じゃんっ」

「俺はこれがピツタリだと思うぞ。この絵はお前と同じようにかがやいていて、すきとおってる」

今までこんなにほめてくれることがなかったくらいに、ほめられた。絵は描いた人を表すって聞いたことがあるが、どうやらそれは本当らしい。

僕はこうやってコウちゃんと話すことが何より楽しくて大好きなんだと、四週間という時間が教えてくれた。最後に一つだけコウちゃんに質問をしてみた。

「コウちゃんって僕のこと嫌い？」

「嫌いじゃない」

『嫌いじゃない』その言葉を待っていた僕はもう一つ聞いてしまった。

「じゃあ何で僕にあんまり笑わなかったの」

「それは…」

少しとまどった様子のコウちゃん。これではまたあやしく思えてしまう。

僕が「やっぱり嫌いなんだね。おさなじみに嫌われるってカッコ悪いなあ」と言いかけてコウちゃんが話した。

「お前には素で接してたつもりで、別に差別ではないし、むしろお前以外のところでは笑顔作ったりしてるから…なんかごめん」

「そうなの!? 勝手に誤解してごめんねっ」

その事実がうれしくて、安心した。

「てかお前、そんなんだといつまでたっても自立できないぞ」
コウちゃんがいないと生きていけない僕が自立するには手間がかかりそうだ。

「四週間で一生のように思えたよ…」

聞こえないようにつぶやいた。